【書評論文】

戦後世代に伝える日本占領期の実相

Paul Kratoska, *The Japanese Occupation of Malaya and Singapore, 1941-45: A Social and Economic History* [2nd ed.] (Singapore: NUS Press, 2018)

渡辺洋介

Ⅰ．著者の経歴と業績

本書は1997年にUniversity of Hwaii Pressから出版された *The Japanese Occupation of Malaya, 1941-1945: A Social and Economic History* の第2版である[1]。本稿では、まず著者ポール・クラトスカ（Paul Kratoska）の経歴と業績を紹介し、つぎに本書の内容を第1版と比較しつつ論評を加えたい。

クラトスカはチェコのボヘミア人にルーツを持つアメリカ人で、シカゴ大学で博士号を取得した後、1977年からペナンのマレーシア科学大学（Universiti Sains Malaysia）で10年間教鞭を執った。その後、1987年にシンガポール国立大学（National University of Singapore）に移籍し、2002年からはシンガポール国立大学出版会（NUS Press）で出版部長（Publishing Director）を務めている。クラトスカはマレー語を解すマレーシア研究者というだけでなく、現地在住歴が40年以上に及び、妻もマレーシア人という現地に根づいた歴史家である（Kratoska, 1998: xv; Kratoska, 2005: 421; 本書: xix-xx; 今井, 2007: 4)。そうしたバックグラウンドのためか、現地の人びとの視点を大事にする姿勢が研究に表れている。

クラトスカは学生時代の1971年に初めてマレーシアを訪れ、1973年から74年にかけて英領マラヤにおける稲作についての博士論文を執筆（本書: xix）し、ここからビルマやタイを含む東南アジアの稲作と食糧生産に関する研究へと研究の幅を広げていった（例えば、Krastoka, 1982; Krastoka, 1988; Kratoska, 1990)。1998年、クラトスカは *Food supplies and the Japanese occupation in South-East Asia* を編集し、その中で日本占領期における東南アジアの稲作を扱った2つの論文を執筆している（Kratoska, 1998)。また、1997年には *The Japanese Occupation of Malaya* の第1版を出版し（Kratoska, 1997)、研究範囲を稲作と食糧から日本占領期の政治、経済、社会、文化へと広げてい

[1] 第一版には日本語訳もある。ポール・H・クラトスカ（今井敬子訳）(2005)『日本占領下のマラヤ 1941-1945』東京：行人社。

る。

本書によると、クラトスカは以下のような事情から日本占領期に関心をもつようになったそうだ。彼が博士論文執筆の際に困ったのは、日本占領期の資料がほとんど無いことであった。結局、資料が見つからず、その時代は空白にせざるを得なかった。その後、ペナンで教鞭をとり、学生に聞き取り調査に基づく研究課題を課したのだが、学生の中には非常に熱心に日本占領期に関する聞き取り調査を行なった者が何人かいた。内容も高水準だったのでその論文を出版することにしたのだが（Kratoska and Abu Talib Ahmad, 1989）、クラトスカはその時、学生たちの日本占領期に対する強い関心と多大な熱意に強い印象を受けたようだ。その後も、クラトスカは英領マラヤの稲作と食糧生産の研究を続けたが、1987年にシンガポールに移ってから、マラヤの郡政庁（district office）が作成した占領時代の文書を発見し、これまで空白にせざるを得なかった戦時下の食糧事情を垣間見ることができた。しかし、この資料だけではあまりに断片的だったため、アメリカ国立公文書館を訪れてさらなる資料の発掘に努めた。そこでアメリカ陸軍軍事史センター所蔵の日本関係資料（日本の将校の陳述書の英訳）を紹介され、断片的であった情報は次第に整理され、日本占領期の全貌が徐々に頭の中で姿を現してきた。これが本書の執筆につながったとのことである（本書: xix-xx）。

上述のクラトスカの経験が示唆するように、マラヤにおける日本占領期の研究は他のアジア地域と比べて進んでいなかった。その大きな原因は肝心の一次資料が欠けていたからである。英軍は日本軍侵攻時の焦土作戦で公文書を焼いてしまい、焼却を免れた文書も戦時の混乱で紛失・略奪され、また、日本軍も降伏後、連合軍による処罰から逃れるため、ただちに公文書を組織的に焼却した（本書: 5-6）。ただ、実際にはすべての文書を破棄することはできず、焼却を免れた文書は連合軍に接収された。マラヤの場合は、北部4州（プルリス、クダ、クランタン、トレンガヌ）が1943年に日本からタイに移譲されたが、タイ政府はクダ州とクランタン州の統治をマレー人に委ねていたため、この2州に関しては多くの公文書が日本軍による焼却処分を免れた（本書: 7）。その後、1960年代始めに連合国が接収した日本関連資料の日本への返還が始まり、1970年代に入ってこうした資料を使った研究が日本で本格化した。1980年代に入ると、トヨタ財団の助成を受けた「占領期に関する資料調査フォーラム」が、1986年にインドネシアで、1990年にフィリピンで、1993年にマレーシアとシンガポールでそれぞれ発足し、日本占領期に関する資料の収集が行われた。1995年11月、これらの集大成となる「東南アジア史の中の日本占領」と題するシンポジウムが行われ、クラトスカも参加した（今井, 2007: 3-4）。また、この年にクラトスカは *Malaya and Singapore during the Japanese Occupation* を編集・発行している。同書は編集のみで執筆はしていないが、これが日本占領期に関する彼の最初の出版物である（Kratoska, 1995）。こうした巡り合わせがあり、かつ一次資料もある程度揃ったことにより、*The Japanese Occupation of Malaya*（第1版）が1997年に生ま

れたのである。

日本占領期に関するクラトスカの研究はこの第1版を起点としており、2018年に第2版が出版されるまでの間に東南アジアの日本占領期に関する著作をいくつも出版している。その内容は、東南アジアの植民地・占領地を扱った俯瞰的なものから、泰緬鉄道などにおける労務者の研究、スランゴール州、ペラ州、東ティモール、香港の日本占領期の研究まで、多彩な内容を含んでいる（Kratoska, 2001; Kratoska, 2002; Kratoska and Goto, 2003; Kratoska and Nakahara, 2005; Kratoska, Raben and Nordholt, 2005; Kratoska, 2006a; Kratoska, 2006b; Kratoska, 2010; Kratoska, 2013; Kratoska, 2015）。では、こうした研究の成果は2018年に出版された第2版に十分に反映されているのだろうか。以下においては、第2版の各章の内容を簡潔に紹介しながら、第1版とどう変わったか指摘し、論評を加えたい。

Ⅱ. 本書の内容と書評

クラトスカは本書を執筆した動機について「はじめに」でつぎのように述べている。日本占領期ついての研究は、ほとんどは軍事史や戦争捕虜の辛い体験に関するもので、一般市民がどのような体験をしたかについての研究は少ない。また、世間で言われていることは事実に反しているか、不正確なことが多い。たとえば、イギリスがマラヤを放棄したのは第二次世界大戦に起因しているとか、華人は日本を敵対視したが、マレー人は協力的で、インド人は日本がインド独立を支援するという理由で協力したとかである。しかし、マラヤにおけるイギリス支配の終結は戦後12年が経った1957年であり、その決断にマラヤ陥落はほとんど影響を及ぼしていない。また、大多数の華人は日本にしぶしぶではあっても協力的であった。マレー人は中立を保とうとしたが、次第に日本の支配を嫌うようになった。多くのインド人は、独立運動に対する日本の支援は自分たちの大義にとって有害だと考えていた。ほとんどの人は日本に協力したが、日本が掲げる目的を共有していたわけではなく消極的な協力にすぎなかった（本書: 1-2）。クラトスカはこのように先行研究の偏りと世間に流布されている日本占領期像の不正確さを指摘して、現地の人びとの視点から歴史を再構成し、日本占領期の全体像を示そうと試みた。そうした問題意識から、本書は国家の歴史は最小限に抑え、幅広い資料に基づいて日本占領期の一般の人びとの生活を重点的に描いている。

本書は「はじめに」から第12章「結論」まで13章で構成されている。第1章で戦前のイギリスのマラヤ統治について概説し、第3章から第10章までは日本占領期について各分野に分けて説明し、第11章では戦後のイギリス統治について述べ、第12章の結論につなげている。この構成は第1版からまったく変わっていない。また、クラトスカが「第2版へのまえがき」でことわっている通り、複雑な大著をばらして再構成するのは大変困難

な作業であり、第2版にはいくつかの新資料を加えたが、大部分の内容と結論はそのままである（本書: xvii）。では、具体的にはどの部分が第1版と変わったのであろうか。以下においては、各章の内容を簡潔に紹介しながら、第1版から変わった部分を指摘したい。

「はじめに」には、すでに述べた通り、本書を執筆した動機が書かれている。この章は第1版とほぼ同じで、文章表現を変更した（本書: 4）他は日本の年号に関する補足説明を一行追加した（本書: 9）のみである。

第1章「戦前のマラヤ」は日本との戦争が始まる前のマラヤについての概説である。イギリス植民地統治機構、マラヤに住む各民族、マラヤで採れる天然資源、マラヤの産業などについて触れている。第1版との違いは、マラヤの産業について触れている部分で日本の漁師がシンガポールの半分近くの漁獲量を占めた事実（本書: 19）が追加された点のみである。

第2章「占領の開始」は、戦前の日英対立から日本軍のマラヤ侵攻、イギリス軍の降伏、日本占領の開始までを扱っている。食糧供給に関する記述が詳しいことや、日英双方の見方に目配りをし、新聞記事を多用して当時の社会状況についても紙幅を割いている点にクラトスカの姿勢が表れている。第1版との違いは、マレー人の忠誠心に関する議論（本書: 38-39）、チャーチル首相とパーシバル司令官とのやり取り（本書: 40-42）、イギリスの焦土作戦（本書: 50-52）、欧米人捕虜と抑留者（本書: 52）、占領後の衛生状態の回復（本書: 53）について追加された点である。

第3章「日本のマラヤ統治」は、軍政の統治機構、軍政の方針と施政、財政、司法、隣組と民兵組織、北部4州のタイへの移譲について述べている。日本人はイギリス人より現地の事情を知らず、英語やマレー語の能力も低かったため、日本軍はマラヤ統治の際に既存の官僚機構をそのまま使わざるを得なかったとクラトスカは指摘している。第一版との違いは、ペラ州の行政に関する情報の追加（本書: 55）とパラグラフの順番入れ替え（本書: 62-63）のみである。

第4章「民族政策」は、華人、インド人、マレー人、ユーラシアン（欧亜混血者）に対する日本の政策と各民族の日本との関係について述べている。華人政策の部分では華人粛清と奉納金徴収問題について、インド人政策ではインド国民軍（Indian National Army）とインド独立連盟（Indian Indipendence League）について、マレー人政策では、スルタンと貴族、宗教指導者、日本の行政機関で働くマレー人、マレー青年同盟（Kesatuan Melayu Muda）の4つのグループに対する日本の政策について論じている。章の最後でクラトスカは、抗日戦争を積極的に支援し日本に強烈な敵愾心を持っていた華人を大量に虐殺したのは、日本軍がシンガポール陥落後にすばやく戦闘部隊を他の戦線に派遣できるようにするためで、それなりの理由はあると述べている。ただ、それは結果的に虐殺が無ければ黙って従っていたであろう多くの人たちに憎悪を植え付けることとなったと評している（本書: 124）。第1版との違いは、ユーラシアンの日本占領期に関する証言（本書:

119）が追加された点のみである。

第 5 章「教育と宣伝工作」は、マラヤでの学校教育、日本語教育、日本の宣伝工作、国歌斉唱、宮城遥拝、祝日、映画、音楽、新聞報道、連合軍の宣伝工作について扱っている。日本が教育と宣伝工作によって目指したのは、人びとの間にアジア・ナショナリズムを育み、日本の戦争を支持する社会的雰囲気を作り出し、西洋の物質主義・個人主義を排して規律と忍耐を重んじる日本精神をたたきこむことであった。その影響は読み書きができる知識階層に対しては大きかったが、圧倒的多数の人びとにとっては深刻化する不況への対応と生活必需品の確保の方がずっと大事であったとクラトスカは評している。第 1 版からの変更点は、注の記述の本文への移動（本書: 129 注 11)、日本語週間の新聞記事の追加（本書: 130)、ペラ州での言語の使用状況に関する情報の追加（本書: 134-135）のみである。

第 6 章「経済」では、経済政策、交通、同業者組合、闇市、工業、労働、医療、衣料、物価について扱っている。労働の部分では失業や労働力不足の問題だけでなく、泰緬鉄道における強制労働についても紙幅を割いて詳細に論じている。戦前のマラヤは大農園、鉱業、貿易が経済の中核だったが、これらの産業は英米市場から切り離されては成り立たず、英米との戦争がマラヤ経済の崩壊につながることは不可避であったとクラトスカは論じている。第 1 版との違いは、シンガポール経済（本書: 164-165)、石鹸工場と消費量（本書: 179, 184)、陥落直後の衛生管理（本書: 195）に関するデータを追加し、職業転換に関する満鉄調査部の分析を加え（本書: 192-193)、注の記述を本文へ移動し（本書: 188 注 82)、記述の順番を変更した（本書: 195-196)。2018 年に満鉄調査部の各種報告書のうちシンガポールに関する部分が英訳・出版されたことをうけて（Huff and Majima, 2018)、そのデータと分析がかなり付け加えられている。

第 7 章「通貨と銀行業務」は日本がマラヤに流通させた新通貨とマラヤの銀行について述べている。日本は占領後すぐに通貨供給量を減らしてインフレを抑え、最初の 2 年間はまずまずの成果を収めた。しかし、英米市場から遮断されたマラヤは輸出産業が崩壊して経済が悪化した。また、軍が物資購入のために軍票を乱発した。その結果、インフレを抑えられなくなったとクラトスカは評している。第 1 版から本文の変更はなく、注の文献を一部削除した（本書: 211 注 26, 注 27）のみである。

第 8 章「大農園と鉱業」ではマラヤの主力産品であったゴムと錫の状況について扱っている。1930 年代のマラヤは世界一の錫産出国であり、世界第二のゴムの生産国であった。通説では、マラヤの錫を求めてイギリスと日本がこの地を手に入れようとしたと言われているが、マラヤが外国の干渉を招いた理由は天然資源ではなく、その戦略的位置にあるとクラトスカは論じている。第 1 版との違いは、ゴム産業の資料（本書: 238-236)、ゴム油の研究を紹介する新聞記事（本書: 237)、ゴム油の使用状況のデータ（本書: 239)、鉄鉱石の採掘・輸送に関する情報（本書: 247）を加えた点である。

第9章「配給と食糧生産」は、クラトスカがマラヤの稲作と食糧生産から研究生活を始めただけあって詳細な記述がなされている。この章では、戦前のマラヤにおける米の生産から話を進め、日本が実施した食糧配給制度、マラヤでの野菜と米の生産、エンダウ、バハウなどへの入植事業について扱っている。戦争で輸入米が途絶えたマラヤで日本は食糧増産運動を実施したが、食糧不足は戦争末期に近づくほど悪化し、住民の多くはタピオカやサツマイモで飢えをしのいだとクラトスカは述べている。第1版との違いは、食糧供給とペナン華人の移住に関するデータ（本書: 250-251, 257, 281）、米の配給に関する事情（本書: 254-255）、バハウへのユーラシアン移住者の証言（本書: 285）が加えられ、いくつかの文章表現が変えられた（本書: 253）。この章でも満鉄調査部報告書の情報を多く追加している。

第10章「占領の終了」は、連合軍の反撃に対する日本の防備、抗日軍の活動、戦争終結からイギリス軍のマラヤ上陸、日本軍の武装解除までの史実を淡々と述べている。第1版との違いは、抗日組織の名称（本書: 298）と占領中の社会に関する証言（本書: 313）を加え、華人抗日軍のペラ州支配（本書: 299）、連合軍のシンガポール空襲（本書: 300-301）、イギリスの反焦土作戦（本書: 304）、占領後の服装（本書: 307 注45）、英印軍上陸地点（本書: 311）、マラヤ共産党の日本人（本書: 312）について追加している。また、注の記述を本文に移したり（本書: 294 注13, 注14）、パラグラフの順番を変えたりして（本書: 301, 304）、この章には比較的手が入っている。

第11章「戦後」は、日本敗戦後にマラヤに戻って来たイギリスがどのような統治を行なったかについて述べている。この章では、マラヤ陥落の原因究明、戦犯と対日協力者の処遇、戦時中の死者数、栄養失調、戦後復興、通貨と銀行、戦後賠償、食糧供給について扱っている。イギリスはマラヤに復帰後、日本占領中も残っていた戦前のイギリス統治機構を使った。ほとんどの建物は破壊を免れ、機械は修理や交換をすれば使用でき、村の水路は土砂を取り除けば使えた。こうしたインフラが復旧した頃に朝鮮戦争が起き、マラヤの経済は活況に沸いたとクラトスカは指摘している。第1版との違いは、シンガポールで行われた日本の降伏式典に関する証言（本書: 314-315）、イギリス軍政と計画課（本書: 317）、イギリス政府における計画課長と戦争省の立場（本書: 318-319）、マラヤ連合に対する計画課長の意見（本書: 319-320）、イギリスのアトリー首相のコメント（本書: 322）、シンガポールの密輸黙認に対する不満（本書: 350）が追加された点である。また、注の記述が本文に移り（本書: 329-330 注32）、いくつかの文章表現が変わっている（本書: 320, 353）。

第12章「結論」は、日本占領期の影響と解釈について、時代の変化や立場の違いによって学者や政治家の見解が変化してきていることを論じている。例えば、シンガポールは日本占領で各民族が辛苦を共にした経験から民族間の垣根が低まったと見るのに対して、マレーシアでは日本のマレー人優遇が民族間の対立を生む原因となったと見られている。ま

た、1992年出版のマレーシア小学5年生用歴史教科書を見ると、マレーシアの独立に対する日本占領の影響は大きくなかったという解釈が示されている。同書では日本占領より前にマレー人はナショナリズムに目覚めていたと記述されており、日本占領期についてはほとんど触れられていない。クラトスカはこうした事例を挙げてマレーシアとシンガポールが日本占領に求める教訓は戦後に生じた国内問題を説明するのに使われるだけとなっていると指摘している。この章は第1版とまったく同じである。

以上見てきたように、クラトスカ自身も認めているが、第2版と第1版の間で大きな違いは無く、本書で展開されている議論もまったく変わっていない。どういう訳か、第1版出版後のクラトスカの研究もほとんど第2版に反映されていない。マレーシア科学大学のウィー・キャッギン（Ooi Keat Gin）は本書を評して、日本占領期の新たな解釈や視点を示しておらず「第2版」というよりは「改訂版」（revised edition）とすべきだったのではないかと述べている（Ooi, 2018: 165）。

ただ、第2版を読むと第1版と内容はほぼ同じでも単語や表現を変えている部分が少なからずあった。文章執筆の際には原稿を納得するまで50回見直すという話をクラトスカから聞いたことがあり、本書からもより良い文章を書くことへの情熱が感じられた。しかし、それが災いして、第1版で緻密に構成され考え抜かれた末に書かれた文章の中に、新たな資料や研究成果を文章の流れを崩さずに組み込むのに苦労して、第2版で多くの変更を成しえなかったのかもしれない。

第1版に対してはすでに多くの書評が出されている（Frei, 1998; Best, 1998; Tomaru, 1999; Sims, 2001; 明石, 2001）。明石陽至は「本書はすぐれた実証研究で、この分野の必読参考文献として長く残る労作である」と評しており（明石, 2001: 272）、評者もこの点については同感である。第1版、第2版ともにマレーシア、シンガポール、イギリス、アメリカで収集した一次資料をふんだんに使い、マラヤの人びとの視点を大事にして日本占領期の全体像を描いている。ただ、使われている一次資料は日本占領期の研究であるにも関わらず日本語のものは英訳資料しか見ていない。中国語の一次資料も使っておらず、華人の声は中国語から英訳された資料か、華人が英語かマレー語で書いた資料のみに頼っている。こうした資料の偏りが影響したのか、第1版、第2版双方とも華人粛清や奉納金徴収といった日本の過酷な政策に対する評価がやや甘い。日本語や中国語、タミール語ができる研究者と共同研究をし、議論を重ねればさらに素晴らしい作品が生まれるのではなかろうか。ただ、日本語を解さない著者でも、日本占領期に関するこれだけの作品を残せることに強い感銘を受けた。

また、明石は第1版に対して上述のウィーの指摘と同様に「事実の実証的論述に視点を置いているため、彼の意見があまり表面に出てこない」点を批判しているが（明石, 2001: 272）、私はこのスタイルにも利点があるように思われる。なぜなら、クラトスカが「はじめに」で触れている通り、本書の目的のひとつは戦後のマレーシアやシンガポールで通俗

的に流布されている一面的で不正確な日本占領期の理解を正すことにあるからである。そのためには、著者の意見が「正しい」ことを証明する一次資料を選び出し特定の視点から著者の意見を前面に打ち出すのではなくて、日本軍、連合軍、マラヤの各民族といった多くの視点や立場から書かれた様々な一次資料を提示して、可能な限り占領期の全体像を示せばよく、その解釈は読者に委ねていいのではなかろうか。著者の意見を強く打ち出すことは、読者を著者が主張する解釈に導くこととなり、それでは新たな一面的理解を広めるだけである。こうした点を考慮して、クラトスカはあえて様々な声を提示し、日本占領期に生きた人びとの多様性と複雑性を示したかったのではないかと思われる。

最後に、これは感想であるが、評者は戦争の集団的記憶を専門とし戦後の言説を中心に分析してきたため、評者の日本占領期の理解は歴史教科書や戦後のマスメディアの議論に強く影響されていることを改めて自覚した。戦後の言説に強く影響されるのは戦争を体験していないシンガポールやマレーシアの若い世代もおそらく同じであろう。戦争体験者が亡くなっていく中で、教科書やマスメディアといったバイアスをかけずに戦後世代が戦争中に実際に何が起きたのかを正確に知ることはますます難しくなっている。そうした中で、日本占領期の複雑な全体像を正確に伝えようと試みている本書（第2版）が2018年に出版されたことの意義は大きい。本書はふんだんに一次資料を用いた大変な力作であり、その価値は今後も色褪せることはないであろう。

〈参考文献〉

明石陽至（2001）「書評 Paul H. Kratoska *The Japanese Occupation of Malaya: A Social and Economic History, 1941-1945*」『軍事史学』第36巻第3・4号。

今井敬子（2007）「『日本占領下のマラヤ 1941－1945』におけるアーカイブスの利用」『レコード・マネジメント』No. 53。

Best, Anthony（1998）“The Japanese Occupation of Malaya, 1941-1945: A Social and Economic History,” *RUSI Journal*, 143(5).

Frei, Henry（1998）“Malaysia - The Japanese Occupation of Malaya, 1941-1945,” *Journal of Southeast Asian Studies*, 29(2).

Huff, Gregg and Majima, Shinobu（translators and editors）（2018）*World War II Singapore: The Chosa-bu Reports on Syonan*, Singapore: NUS Press.

Krastoka, Paul（1982）“Rice Cultivation and the Ethnic Division of Labor in British Malaya,” *Comparative Studies in Society and History*, 24(2).

———（1988）“The Post-1945 Food Shortage in British Malaya,” *Journal of Southeast Asian Studies*, 19(1).

——— (1990) "The British Empire and the Southeast Asian Rice Crisis of 1919-1921," *Modern Asian Studies*, 24(1).

——— ed. (1995) *Malaya and Singapore during the Japanese Occupation*, Singapore: Singapore University Press.

——— (1997) *Japanese Occupation of Malaya: A Social and Economic History*, Honolulu: University of Hawaii Press.

——— ed. (1998) *Food Supplies and the Japanese Occupation in South-East Asia,* London: MacMillan Press.

——— ed. (2001) *South East Asia, Colonial History*, New York: Routledge.

——— ed. (2002) *Southeast Asian Minorities in the Wartime Japanese Empire*, London: Routledge Curzon.

——— (2006a) "Singapre, Hong Kong and the End of Empire," *The International Journal of Asian Studies*, 3(1).

——— ed. (2006b) *The Thailand-Burma Railway, 1942-1946: Documents and Selected Writings*. London: Routledge.

——— (2010) "Timor Lorosae. Materials on East Timor during World War II," *Journal of Southeast Asian Studies*, 41(2).

——— (2013) "Chettiar Moneylenders and Rural Credit in British Malaya," *Journal of the Malaysian Branch of the Royal Asiatic Society*, 86(1).

——— (2015) "Selangor and Perak in 1942 (皇紀 2602): Japan's Occupation of Malaya Begins," *Journal of the Malaysian Branch of the Royal Asiatic Society*, 88(1).

——— (2018) *Japanese Occupation of Malaya and Singapore, 1941-1945: A Social and Economic History*, Singapore: NUS Press.

Kratoska, Paul and Abu Talib Ahmad eds. (1989) *Pendudukan Jepun di Tanah Melayu, 1942-1945: Kumpulan Esei Sejarah Malaysia oleh Pelajar-Pelajar Universiti Sains Malaysia* [Japanese Occupation of Malaya, 1942-1945: A Collection of Essays on Malaysian History by Students at Universiti Sains Malaysia], Pulau Pinang: Kertas-kertas Berkala dari Pusat Pengajian Ilmu Kemanusian No. 4, Universiti Sains Malaysia.

Kratoska, Paul and Goto, Kenichi eds. (2003) *Tensions of empire: Japan and Southeast Asia in the colonial and postcolonial world*. Singapore: Singapore University Press.

Kratoska, Paul and Nakahara, Michiko eds. (2005) *Asian labor in the wartime Japanese empire: unknown histories*. Armonk, N.Y.: Sharpe.

Kratoska, Paul, Raben, R. and Nordholt, H. S. eds. (2005) *Locating Southeast Asia:*

geographies of knowledge and politics of space. Singapore: Singapore University Press.

Ooi, Kaet Gin (2018) "Book Review: The Japanese Occupation of Malaya and Singapore, 1941-1945: A Social and Economic History (2nd edn)," *Journal of the Malaysian Branch of the Royal Asiatic Society*, 91(2), p. 165.

Tomaru, Junko (1999) "The Japanese Occupation of Malaya (1941-1945): A Social and Economic History," *The Journal of Asian Studies*, 58(3): 846-848.

Sims, R (2001) "The Japanese Occupation of Malaya, 1941-1945: A Social and Economic History," *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*. University of London, Oct 2001.

（わたなべ・ようすけ　大阪経済法科大学）